
「中国近現代文学研究」の特集にあたって

編集部

近年の日本では、若い研究者や大学院生等を中心に、映画、演劇、音楽、漫画といった非文字テキストに関する研究が人気を博しており、一方の文字テキストに関する研究は、時流を離れた古めかしいものとして敬遠されがちである。もちろん、非文字テキスト研究の進展とその成果には目を見張るべきものがあり、文化史や社会史を論じる上で今や不可欠なものとなっているが、同時に、主に紙媒体による文字テキストが文学研究の原点であることには何ら変わりがない。加えて、中国の近現代文学には未だ解明されていない事柄が多く残されており、掘り下げるべき研究課題も多い。そのため、本号ではあえて文字テキストにこだわって特集を組むことにした。本特集でいう文学研究とは文字テキストを資料とする研究を指す。中国文学の中国とは、中国大陸に限定するというものであるが、例外として自らを中国作家と称する作家の作品研究もここに含めた。近現代文学とは清末から当代に至る文学をいう。

個人的な話で恐縮だが、私が七〇年代に台湾で大学生活

を送っていたころ、台湾における中国近現代文学研究は緒に着いたばかりで、中国三〇年代の左翼文学に関する研究などはまだタブー視されていた。だが、タブーであることがかえって文学青年の好奇心や興味を掻き立てる結果ともなり、私たちは、台湾に留学してきた華僑の子弟を通じてそれらを「密輸」し、「地下出版」の本を大量に読み漁った。私も、魯迅、茅盾、巴金、老舍、丁玲などの作品を貪るように読んだ。

その後、私は一九八五年に来日し、関東で四年間の「彷徨の歲月」を過ごしたのち、一九八九年に関西の大学に移った。そこで出会ったのが中国近現代文学の研究者達が一九七〇年に創った「中国文芸研究会（通称、文芸研）」である。私はこの研究会に参加することにより、再び中国近現代文学に対する関心と情熱を取り戻した。また、研究会活動を通じて、当時、第一線で活躍されていた先生方とも親しく接する機会を得た。伊藤虎丸先生、太田進先生、丸山昇先生、木山英雄先生をはじめとする先生方に、多くの教えを受けた。

続いて一九八一年、丸尾常喜先生らが中心となって「中国現代文学研究者の集い」（現在の名称は「中国現代文学研究者懇話会」）が結成された。これは、全国の中国現代文学研究者達の結びつきのゆるい集まりで、研究交流と親睦をかねて年一回会を開いている。私は、これにも何度か参加させていたのだが、会場を包んでいたあの熱気は今でも忘れられない。一九九〇年代、みなは日本の中国現代文学研究にはすばらしい未来が広がっていると思ひ、ある種の昂揚感の中に在った。

だが残念なことに、ここ数年の集まりには往年のような熱気が感じられなくなり、私はいささか寂寞の念を禁じ得ないのである。ただ、近二三年、研究のあり方を自覚的に考えようとする気運がみえてはきたのであるが。その衰退の要因としては、この分野の研究者が減少したことや、日中関係をはじめとする研究環境の変化など、さまざまなことが指摘できるだろうが、今、私自身に、原因を探索して解決策を見いだす力はない。しかし、せめて今回の特集が、伊藤虎丸先生、太田進先生、丸山昇先生といった戦後第一世代の斯学の先達への、さらに先達に続きわれわれをリードして下さり、だが、人生半ばにして病を得、また不慮の事故で逝去された、新村徹先生、丸尾常喜先生、坂口直樹先生への鎮魂歌になればと思っている。

本特集は紙幅があるため、中国近現代文学の全て

のジャンルをカバーするものではないが、各分野の研究をリードする一篇の論考を収載した。それらは、中国のこの一世紀の文学が社会に芽生えつつある公民意識にどう関与したのか、文学は社会と政治に介入し得るのか否かを考察した研究、中国文学にとつて世界とは何かというスケールの大きい斬新な研究、当代中国文学史の全体のフレームの中で、「過渡的状态」の意義を検討する研究、南洋をテーマとした近代漢詩の研究、中国現代文学における「声」という新しいテーマの研究、現代詩人穆旦の研究、当代詩人の所謂「余秀華現象」についての研究、現在の中国ではまだ全面開放されていない満洲国文学の研究、比較文学の視点からみた中国人英文作家の研究、日本でも徐々に関心が高まりつつある現代チベット文学の研究、マレーシア出身の華人で自らを中国作家と称する作家の作品研究などである。論文執筆者の出身地は、日本、中国、台湾、マレーシアなど多地域にまたがっており、いずれも、本国のみならず国際的にも活躍している気鋭の研究者である。このことは、中国近現代文学研究がすでにクロスオーバーの学術研究となつて示している。特別寄稿は、北岡正子先生、岡田英樹先生、小谷一郎先生、范伯群先生から頂戴した。次世代の若い研究者にとつて示唆に富む内容である。

この特集が現在の日本の中国近現代文学研究に対して一石を投じるものになることを願って止まない。（黄英哲）